絹の起源と現状

奥　平　志づ江

1　序

絹織物の原料である生糸が日本に伝えられたのは西暦紀元前二世紀頃のことと、推定されるが、其の後日本の気候、風土、風俗とともに養蚕、織物、染色の技術は独自の発展を遂げ、今や生糸生産量において原産国を遙かに凌ぎ、その用途も特に日本人の衣生活文化に益々密接な関係と影響力を持つに到った。そこで絹文化の起源とその伝播経路を尋ね、生糸の生産と絹の用途について現状を調べてみることにした。

2　絹文化の伝播

養蚕に関する記事としては、古事記の下巻に「韓人口子臣、口比売、奴理能美の兄妹が、一度ははう虫、一度は殻、一度は飛鳥に、三度形態を変える不思議な虫を仁徳天皇の皇后に献上した」とあるのが日本最古のものであろう。又日本書記巻１１の仁徳期には「新羅国からの朝貢が途絶えたので、これを責めたところ、絹１４６０匹を献上した」とあり、

巻６の垂仁期には「任那の使者に赤絹１００疋を持たせて帰国させた」と云う記述がある。

巻９の神功皇后記には「新羅、百済が入貢し五色の練絹を献じた」とあり、巻１０の応神記には「１４年春百済王縫衣工女を献ず、３７年呉より工女兄媛、弟媛、呉織、穴織の四女を献ず」とある。紀元３世紀末に書かれた中国の史書「魏志倭人伝」によると「正始４年（紀元２４３年）倭正卑彌呼が生口、倭錦、絳青縑、県布、帛布を献ず」とある。さらに「卑彌呼死して男王立つも国中服せず、卑彌呼の宗女壹与１３才で王となり生口３０人、白珠５００孔勾珠２０枚、異文雑錦２０匹を貢ず」などの記述がみられる。卑彌呼が当時大和朝廷の支配者であったか、あるいは九州の一部属長であったかについては未だ明かでない。当時の絹織物の技術は北九洲において高度に発達しているが、関東、東北に伸びたのは大分後の様である。同じく日本列島における縄文、彌生の時代区分にも地域的にかなり年代のずれがあること、又出雲文化、

夷蝦文化の頃北九州と朝鮮との交通以外にも大陸との直接交流のあったことも当然考えられる。古代日本と大陸との交通が政府間で正式に開かれたのは3世紀後半以後であろうが、一般人の往来は朝鮮海峡を通じ、東支那海を横断し、あるいは千島、樺太、北海道又は沿海州から山陰、北陸地方にと、縄文化、更にそれ以前の新石器時代から行なわれていた事は、押型文、爪型文、櫛目文の土器などが朝鮮半島から広くユーラシア大陸の一円に分布する土器と類似していることからも大凡推論しうる。しかし今日もなお、乾稲、水稲の稲作文化が何時、何処から日本にもたらされたか明確でないのと同様、絹文化についても渡来の時期と経路は明らかでない。養蚕技術は定住する農耕社会と密接な関係があって発達したのに反し、採集社会や遊牧社会には適しないため充分発達し得なかったものと考えられる。日本の農耕社会の成立期は紀元前5世紀もさかのぼることはないと思われるが、古代メソポタミヤやエジプトの農耕文化は紀元前3～4千年前と推定されている。これら多くの史記等から、絹文化は古代中国に発詳し民族の移動や文化の交流とともに四辺の地域に伝播したものと考えることが適当であろう。

3　紀元前の中国絹文化について

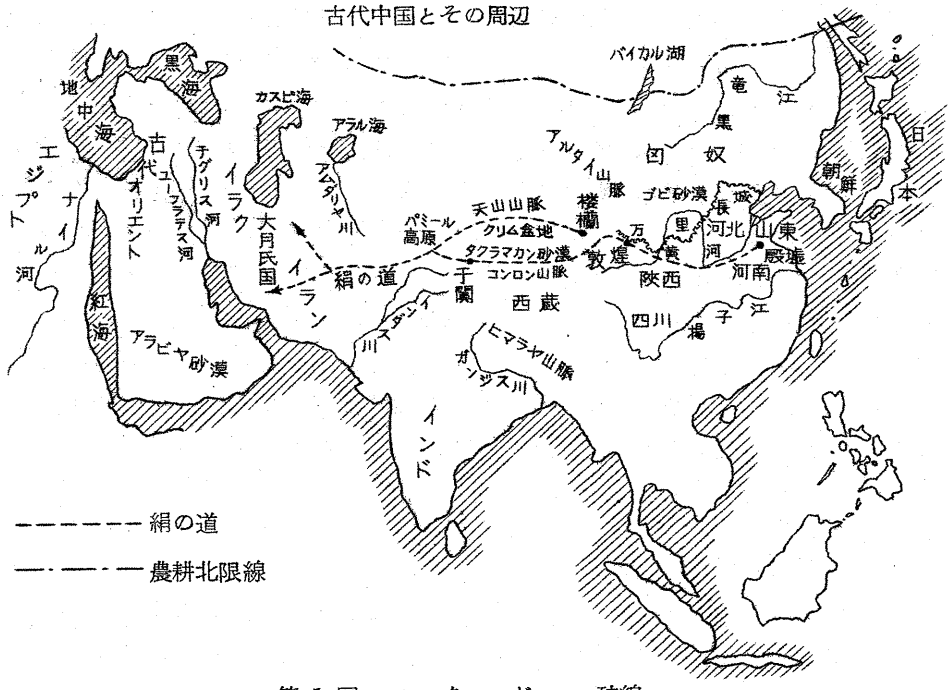
紀元前2～3世紀以降の秦時代の中国絹文化は全盛期であった。詩経、尚書、史記等の文献が現存し、さらにこの時代の高級織物が数多く発見されている。現在までに発見されている最古の絹織物は、スエーデンの国立博物館に現存するが、同国の地理学者スエン・ヘデンが１８９１年から3回にわたり中央アジア、東トルキスタン一帯の探険によって、ロブ、ノールや楼蘭の遺跡を発掘した遺物の中に残る秦時代の錦織の断片である。続いて１９０６年英国の探険家スタインは有名な敦煌遺跡を発掘し、さらに楼蘭の遺跡を再調査し秦の錦など毛織物の綴織の断片を発見している。１９２５年我国の原田淑人博士らによる朝鮮平壌楽浪郡の遺蹟調査によつて秦代の絹が発見されている。秦は紀元前2世紀から紀元後3世紀の初めまで続いた中国古代の大帝国で、楽浪出土品（副葬品）中に在銘の漆器が同時に発見されているが、その銘の建武、永平などより明かに紀元1世紀以前のものであることが立証された。スエーデンの博物館や大英博物館に所蔵されている秦時代の絹もおそらく以上の楽浪土品に近似したものであろが、紀元前後の時代にこのような高度な絹文化が存在していたとすれば、当時の日本、朝鮮、中国の文化交流を考えても紀元2世期半ばころには「魏志倭人伝」の倭王、倭錦…を献ず」も当然あ

り得たことであろう。

4　絹の道（SILK ROAD）注第1図参照

絹の道は紀元前のかなり昔から東西文化交流の大動脈としてあったと考えられる。武帝（紀元前2世紀頃）の時張騫が武帝の命をうけて匈奴夾撃作戦を大月氏国に提案するため、使者として派遣された大旅行によって東西文物の交流が始まったと伝えられている。たしかに張騫の大旅行によって、それまであまり詳しく知られていなかった当時の西域諸国の事情がくわしく伝えられたわけであるが、中国人が2世紀頃まで、全然西域諸国の存在を知らなかったわけではない。当時中国は周末春秋戦国時代であり、すでに秦は西方に大勢力を張り絹織り技術はおそらく当時の秦民族の間には、かなり広く普及していたものと想像される。秦の始皇帝がその全土に養蚕を奨励したことは歴史上有名であり、河北、河南、山東の黄河流域から次第に揚子江上流におよび、沿岸一帯に広がり四川の蜀錦などは天下の逸品と尊ばれる様になりそれぞれが小国としては中央への貢物として、又一般民衆には納税物として、

古代中国とその周辺



第1図　シルクロード……破線

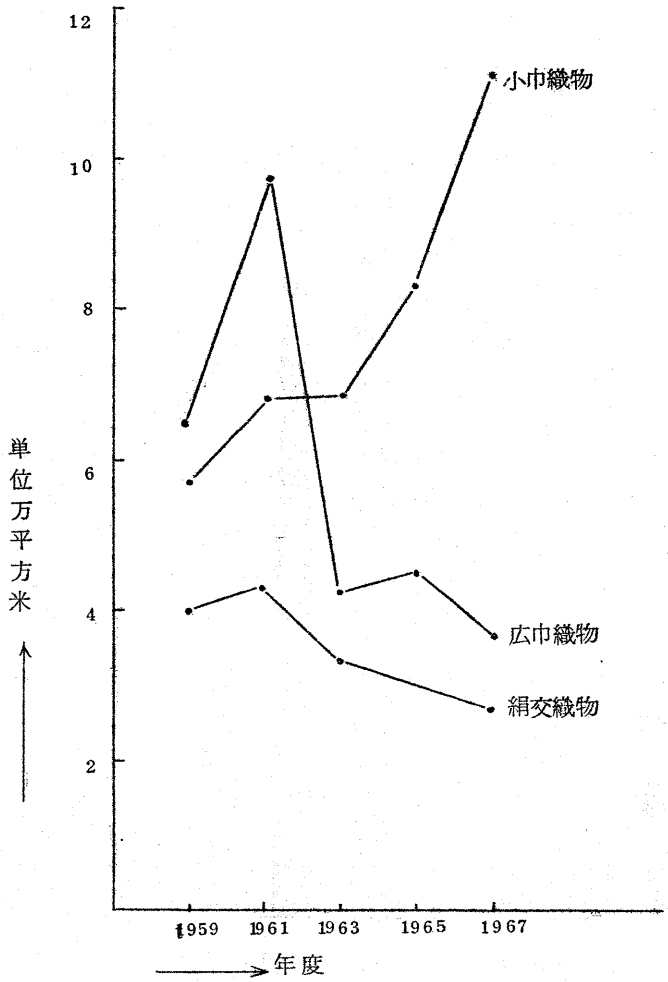
又東西物資の交換に用いられる有力な財として通貨的な役割を果していたと思われる。絹織物の朝鮮や日本への伝播もその頃を中心として活発となってきたであろうし、西トルキスタンからインド、ペルシャの国境におよび広大な奏の勢力圏内では、その気候、風土の条件が備われば当然養蚕、絹織物は行なわれていたと考えられる。しかし中国政府は自国内での絹産業は奨励したが蚕種の国外持出は、当初禁止していたらしい、縦ってヨーロッパではギリシャ時代の末頃まで中国の絹の存在を知ってはいたが、正規のルートで蚕種がもたらされたのは6世紀に入ってからの様である。

聖武天皇は天平5年（733年）多治比真人広成を大使として遣唐船を出発させたところが、その四船のうち二船は漂流、難波して、ようやく大使の第一船が翌年帰国した。この時吉備真備、玄昉など天平文化をリードした留学生達がもどった。つづいて天平8年第2船の副使、中臣朝臣名代が帰国した。名代が伴なって来た人びとには唐僧道璿・婆羅門僧正菩提遷那、カンボジヤ僧仏哲など、のちの大仏開眼会の立役者がいたことも注目されるが、唐朝よりの送使として来日した袁晋卿や皇甫東朝、皇甫昇女などの楽人と共に1人のペルシャ人がいた。その名は李密翳といい、その職業については明らかでないが、同行した唐人のような楽人であったかも知れない。

この東海の孤島に、はるか西方からイラン人がたどりついたということは世界史的に大きな意味があろう。その頃すでに西アジアではササン朝ペルシアがイスラム教徒のサラセン帝国に滅ぼされていたが、つい6・70年ほど前には唐朝の勢力下にあった西域に、亡命の王子ペーロスがペルシア都督府をつくって、王朝回復のため活躍していた。さらに西域の地には、ソクディアナの商人をはじめ、いわゆる胡人（イラン系民族）がらくだのキャラバン（隊商）をひきいて、「世界の屋根」と呼ばれるけわしいそうれい（パミール高原）を越え、茫々として果しなく続く流砂（タクラマカン砂漠)を通って、中国の絹を西方の珍価とかえるために盛んに往来した。それゆえ「シルクロード」に沿って栄えたオアシスの町々にもイラン文化の波がおしよせていたことはいうまでもない。天山南路の北道にあるクチャ（きじ）と南道のホータン（うてん）は西域文化の双璧とうたわれた町である。

5　絹の生産量について

第2図は1959年～1967年までの日本の絹織物の布幅別生産量を示すものである。図に見る通り小幅織物（布幅38cm 位）の生産が著しく増していることは所謂「着物ブーム」によるものと思われる。女性は勿論、男

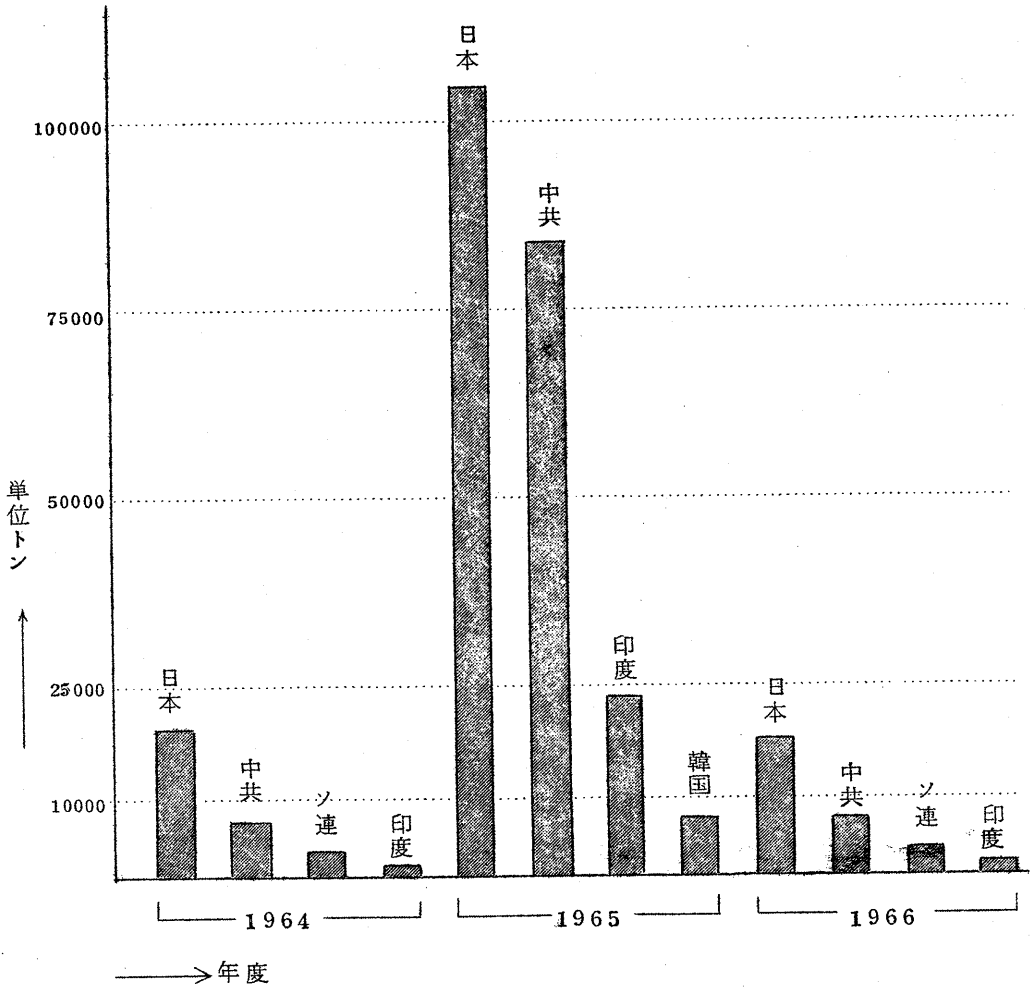


第2図　1959〜1967年日本の絹織物生産量（1968年調査）

性も最近とみに和服を着る人が多くなり、雑誌「きもの」にまで男物の生地の選び方や仕立方について書いてあることはその流行を物語るものと云えよう。又広巾物（主として洋服地）の生産量が低調になつていることは輸出の伸び悩みによると考へられる。

絹交織物（絹と毛、絹と化せん）の生産量は前二者に比べ更に低調になっているのは交織による繊維の特性が却つて低下するためと思われる。

第3図は1964年から3年間の生糸生産量を上位四ケ国について示したものである。図に見る通り日本は生産量において終始1位を占め、1964年、1965年、1966年のそれは夫々全世界生産量の60.1％、39.6％



第3図　1964=1966年世界の生糸生産量（上位4ケ国）
（1968 年調査）

56.5%にあたる。

6　絹の用途について

絹の用途について大別すれば大凡次のようになる。

(1)　衣料用

衣料用縫糸、刺繍糸、レース地、

編物（例えば、手袋、肌着）

織物（小巾物、広巾物、ネクタイ、マフラー等）

(2) その他

外科用縫合糸、　絶縁用糸布、　壁貼用生地、

壁貼用生地、　家具用生地、

カーテン地、　絵絹、投網、篩絹

タイプ用リボン、装身用ネット

7 結

以上絹の起源と生産、用途の現状について述べたが絹本来の優れた数々の特性即ち、絹繊維特有の美しさ、羽毛に近似した軽快さ、柔軟な感触と快い着心地、気崩れしない弾力性、優れた染色加工性（友禅にみる鮮かな染上り）適度の吸湿性、優れた保温性、通気性等を考えるとき、絹織物の技術と用途の多様化と相まつて、絹の歴史は亡びることなく人類とともに永く続くであろう。